

海舟だより

第3号

大田区立勝海舟記念館
平成31年夏開館！

勝海舟が眠る大田区・洗足池の地に、
日本初の勝海舟記念館がオープンします

洗足軒は、明治24年海舟が現在の大森第六中学校の地に構え、昭和2年には旧「清明文庫」の隣地に移転されました。

現存する写真等、情報が少ない建物です。写真や当時の新聞など様々な史料から鋭意調査を進めています。

今後は地域の方々にも情報を頂きながら実態解明を進めていきます。

勝海舟と西郷隆盛 ～江戸無血開城に至る道～

第二話 江戸を救う交渉と決断

海舟が属する旧幕府方と西郷が属する新政府方の両陣営は対立を深め、ついに戊辰戦争へと突入します。慶応4年(1868)1月、鳥羽伏見の戦いに敗れた旧幕府方は、次第に劣勢に立たされました。

新政府軍が江戸に迫った3月、海舟と西郷は各陣営の代表として再会します。会談は、13日に高輪の薩摩藩下屋敷、14日に田町の薩摩藩藏屋敷で行われました。実は9日にも駿府(静岡県)にて旧幕臣山岡鉄舟と西郷との間で会談が行われており、その際に西郷は「徳川慶喜の備前藩お預け」や「完全武装解除」を含む降伏条件を提示しています。一方、14日の会談で海舟が西郷に示した条件は「慶喜の水戸謹慎」や「石高削減分の武装解除」など、西郷案とはかけ離れたものでした。妥結は困難と思われましたが、西郷はこの条件を呑んで江戸総攻撃の中止を決意しています。この背景には海舟に対する西郷の信頼があったのでしょうか。

第三話につづく

大田区立勝海舟記念館では、江戸無血開城に関する資料の展示も予定しております。



プロモーションビデオ

85秒の紹介動画が
完成しました!
大田区ホームページ
からぜひご覧ください。



イベントの詳細や、最新情報はこちら



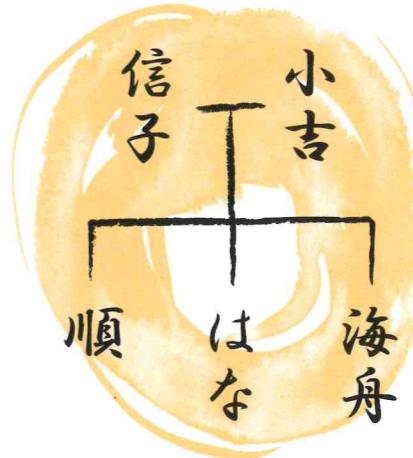
又は [勝海舟記念館](#) で検索

大田区HP

勝海舟の父と母

海舟の家族

勝海舟の父・小吉(惟寅、夢醉)
は、旗本・男谷平蔵の三男である。
7歳の時旗本・勝家の婿養子となりました。妻・信子との間には、海舟・はな・順、3人の子がいました。



父・小吉

生来腕白であり、長じては喧嘩や剣術に明け暮れ、放浪することもありました。父や養父のような幕府の役職にもつかず、無頼漢のように過ごした小吉でしたが、一方では、剣術の腕を活かして宣嘩を仲裁するなど、よく市井の人々と交わっていたようです。

母・信子

海舟の母・信子は気丈な女性でした。夫・小吉の死後、海舟の妹お順が佐久間象山に嫁ぐ際にも、信子が象山を気に入り、貴方なら娘を差し出しても良いと言ったと伝わります。ここに、小吉亡き後の勝家を支える信子の姿が伺われます。息子・海舟が貧しい時期や、出世後の地方に赴いている間も家を守り、戊辰戦争の際にも動搖せずに海舟に道を示しました。海舟はこの母に深く感謝していたようです。

子・海舟への影響

息子である海舟も、後年市井の人々とよく交流していました。『氷川清話』には「政治は、理窟ばかりで行くものではない。実地に就いて、人情や世態をよくよく観察し、その事情に精通しなければ駄目だ」、「おれも維新前には、種々の仲間と交際したヨ」との海舟の言葉が残されています。幼少の頃から、海舟は様々な人々と接する父小吉の姿を見て育ったと思われ、その経験が海舟の人物形成に大きな影響を与えたのかもしれません。

親子の関係を綴った作品



大田区立郷土博物館にて「大田区の勝海舟」展示中です。
(勝海舟記念館開館までの予定)

馬込文士・子母沢寛 著『父子鷹』

本書は、江戸末期の下町を情緒豊かに描く中で、少年・勝麟太郎(後の海舟)の成長を父親・小吉の目線でとらえ、厳しくも慈愛と父性愛にあふれた親子の関係を綴った歴史小説です。昭和30年5月から翌年8月まで読売新聞夕刊に連載されました。

小説家 北海道生まれ
1892~1968

馬込文士。大田区地域の字名をペンネームにした作家

